中央区文化･国際交流振興協会だより

Chuo Cultural And International Exchange Association



「日本橋１－１９三菱倉庫日本橋郵便局」（1990 年） 小川幸治　中央区郷土天文館所蔵

● 特集 ●

江戸にみる日本橋の酒と食

発酵学者　小泉 武夫

- 第 25 回中央区国際交流のつどい
- 平成 28 年度の事業報告と決算
- 中央区まるごとミュージアム 2017

No.68 December 2017

中央区文化･国際交流振興協会発行

文化講座

江戸にみる 日本橋の酒と食

発酵学者
小泉 武夫



平成 28 年度文化講座第 3 回「江戸にみる日本橋の酒と食」

平成 28 年９～ 10 月に３回にわたり開催した文化講座「日本橋をめぐる食のはなし」では、その３回目に現在東京農業大学名誉教授をはじめ全国の大学で客員教授を務めておられるなど、幅広くご活躍されている小泉武夫氏を講師にお招きし、「江戸にみる日本橋の酒と食」と題して講演いただきました。大変好評でしたので、このたび講演に関連した内容について寄稿していただきました。

小泉　武夫　プロフィール



1943 年福島県の酒造家に生まれる。
東京農業大学名誉教授。農学博士。専門は食文化論、発酵学、醸造学。
現在、鹿児島大学、琉球大学、広島大学大学院医学研究科、福島大学ほかの客員教授を務める。

特定非営利活動法人発酵文化推進機構理事長。
全国発酵のまちづくり協議会会長
全国地産地消推移新協議会会長（農水省）
「和食」文化保護・継承国民会議委員（農水省大臣官房）
食料自給率向上協議会会長（農水省大臣官房）など。
食に関わる様々な活動を展開し、和食の魅力を広く伝えている。

著書に
『食あれば楽あり』（日本経済新聞社）、『発酵食品礼讃』（文春新書）、『食と日本人の知恵』（岩波現代文庫）、『食の世界遺産』（講談社）、『江戸の健康食』（河出書房新社）、『醤油・味噌・酢はすごい』（中公新書）、『超能力微生物』（文春新書）、『食でたどるニッポンの記憶』（東京堂出版）、小説『夕焼け小焼けで陽が昇る』（講談社文庫）、『猟師の肉は腐らない』（新潮社）、『幻の料亭・日本橋「百川」黒船を饗した江戸料理』（新潮社）など単著は 143 冊を超える。
日本経済新聞に掲載の「食あれば楽あり」は現在２５年間にわたり連載中。

現在、新聞への連載執筆
『食あれば楽あり』（日本経済新聞、２５年間連続連載中）
『小泉武夫の食魔殿』（北國新聞）
『我が山河・福島への憧憬』（福島民報）
『琉球の酒と食を愛でる』（沖縄タイムス）

2017 年 10 月現在

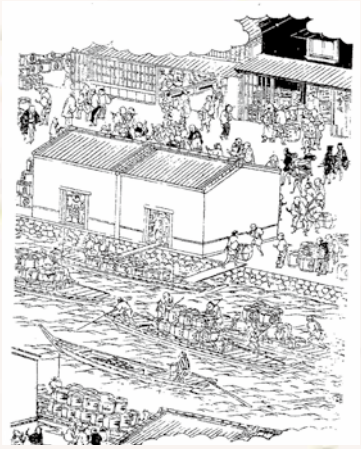
徳川家康が入城して以来、江戸は政治、経済、文化の中心として発展し、次第に全国最大の消費地としての体制が出来上がっていき、元禄時代には国中の物資が江戸に向かって動くようになった。元禄10年（1697）、江戸での酒の消費量は四斗樽で年間 64 万樽だったのが、天明５年（1785）には 77 万 5,000 樽に達し、1800 年代に入って文化文政の頃には、実に 180 万樽もの酒が江戸に入ってきたと記録されている。

天明７年（1787）の『蜘蛛の糸巻』によると、当時の江戸は「町数 2,770 余町、市中人口 128 万 5,300 人」とある。実際の数とは多少の違いはあるだろうが、100 万人を突破していたことは間違いないとみてよいだろう。この人口は当時西欧第一の都市であったロンドンを遙かに凌いで、世界第一位であった。江戸の町人居住地は今の中央区、千代田区、港区、台東区の一部、江東区の一部、新宿区の一部、墨田区の一部を含む小さな地域であったから、その人口密度たるや相当のものであった。

人口を仮に 100 万人とみて，酒が最も多く江戸に入った量（180 万樽）を基準にして一人当たりの年間消費量を算出すると、四斗樽で 1.8 樽となる。一人当たり毎日欠かさずに約２合飲んでいたことになるが、一部の老人や女性、子供など飲酒をしない人たちを差し引いて換算してみると、飲酒者一人３合を一日も欠かさず１年間飲んでいた勘定になる。これは今日の日本人の一人当たりの飲酒量と比べると実に３倍近くもの量となる。なぜ、これほどの酒が飲まれていたかは謎であるが、それにしても江戸の人たちは酒が強かった。

当時、江戸で消費されていたのは「下り酒」と呼ばれた灘目、伊丹、西宮あたりのいわゆる本場からの酒と、美濃、尾張、三河といった東海道筋や江戸周辺からの「地廻り」と呼ばれる酒であった。そのうち「下り酒」は常時７～９割を占めていた。このような大量の酒が江戸に入ってきたのは、灘や伊丹、西宮といった一大産地からの「下り酒」であった。そしてそれらを取り扱うのが江戸市中、とりわけ新川や馬喰町、茅場町に集中していた酒問屋である。京では応仁の乱による混乱が落ちつきはじめると、商品流通も再び活性化し、市中で取引される酒を取り扱う店として、「請け酒屋」が発生した。おそらく今日の酒問屋の最初と思われるが、請け酒屋は次第にその組織を大きくして、やがて問屋の性質をより強くもつ「問丸」へと発展した。

問丸が問屋組織として完成したのは、徳川家康が江戸に入城して、本格的な街づくりが行われだしてからで、江戸への流入者が波のうねりのように押し寄せ、酒も飛ぶように売れたため、本格的な問丸が必要になったのである。そこに加えて、寛永 12 年（1635）から参勤交代の制度がしかれると、江戸は全国最大の消費地としての体制が出来上がり、国中の物資が流れ込むようになった。当時江戸で消費された酒は四斗樽にして 50 万～ 80 万樽で、その約７～９割が本場である池田、伊丹、灘目、西宮といったところから「下り酒」としてやってきた。その輸送には海路が使われ、主役となったのが「樽廻船」であった。酒がどんどん送られてくると、その酒を一時的に貯えなければならない。そのためには倉





▲江戸の新川周辺の酒問屋に樽廻船によって輸送されてきた菰樽に印された酒の商標（『日本山海名産図会』）。

◀江戸新川の酒問屋街。新川の酒問屋街に新酒番船が到着した状態である。七ッ梅の伊丹酒や魚崎酒（灘郷）などが陸揚げされている（『江戸名所図絵』）。

庫や荷車などが必要となるから、そのあたりを整理し、酒の流通を自在にしたのがこの問丸であり、後の「卸し問屋」であった。

江戸の酒問屋仲間は、樽廻船に対応するため、今の中央区新川や茅場町、馬喰町あたりに集中したが、その後も引き続き業を営み、現在に至っているところも少なくない。大阪では古くから、酒屋自身が問屋もかねていたので、専業の問屋は成立しなかったことを考え合わせると、今日の酒問屋とか酒卸し制度は、「下り酒」の大量移動によって生じた流通業であると考えてよいだろう。

問丸は大量の酒を扱っていたから、これを圧倒的多数の消費者の末端に届けることは物理的に不可能であった。そこで、問丸と消費者の仲立ちとなったのが「仲買」という小売屋であった。多くは問丸を経営する者の血縁者や、問丸を勤め上げて優秀であった者、米や食料品問屋の子息などがなった。

小売屋といっても、今日のように店に酒をたくさん並べて売るものではなく、「酒売候」とか「諸白」といった看板を入口に掲げ、酒の入った壺を土間に置いているという程度のものであった。酒屋の屋号などが書いてある、いわゆる貧乏徳利と呼ばれた大徳利や、貧乏樽を下げて客が酒を買いに来ると、酒を枡で計って売っていた。

また、江戸時代に入ると街に居酒屋が出てくる。造り酒屋で直接飲ませたり、その酒屋からまとめて酒を買った問丸が、小分けして仲買に酒を卸す。仲買はこれを一般民衆や居酒屋に売り、居酒屋はこの酒を客に供した。

居酒屋の最初は天正年間（1573～92）、造り酒屋の店先に「居酒致し候」という看板をかかげて、隅のほうで立ち飲みさせるところがあって、そのような酒屋のことを「居酒屋」と呼んでいたのに始まる。その後、江戸や大坂では濠の増改築や水路の整備、たび重なる大火などで土建業者が集中し、多くの職人や人夫が地方から続々と集まってからは、必然的に酒を専門に飲ませる屋台や店ができた。これらの店に立ち寄るのは、酒宴の席に座る当てのない者、例えば若い奉公人、人足、浪人などがほとんどで、その辺りの様子は当時の『職人尽絵詞』（鍬形蕙斎筆）などに残されている。

この種の居酒屋はその後も数を増し、寛永７年（1630）に江戸市中に十数軒あった居酒屋が、200年後の天保元年（1830）には200軒を超す数となった。その後、天保の改革（1841）の取締りで、一度はその大半が菓子屋などに看板替えしたこともあったが、幕末にかけては江戸、大坂のほか全国の主要地で再び激増していった。

このころから、酒に各種の肴を添える店が多くなる。そのような店にはたいてい「酒めし」とか「酒飯屋」という看板が下がっていて、今にいう縄暖簾や赤提灯も、この当時から軒先に掛けるのが習慣となっていた。幕末に近いころの居酒屋では、枡酒一杯が上等酒で12文、中等酒10文、並等酒６文であった。最低６文あれば枡酒一杯は飲めたということから、今でもところどころに「六文銭」などという名前の居酒屋を目にすることがある。

居酒屋と同じころ、「遊郭」も発生している。遊郭は豊臣秀吉によってすでに天正13年（1585）に始められ、徳川幕府がこの制度を継承整備していったので、江戸時代には全盛を迎えた。

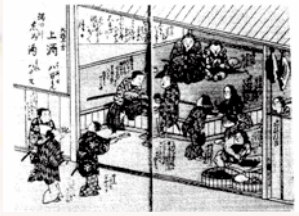
遊郭では粋な遊女を相手に、男たちは昼からさえも豪華な料理を食べ、酒を飲んで興じていた。元禄期に入ると遊郭の周辺には「茶屋」や「飯盛旅籠」なども出てきて、ここでも酒と肴を介しての男女の関わり合いが行われていた。また、酒と料理を主体とした「料亭」もこのころから大盛況であり、さらに酒と料理を前にしながら芝居見物や歌舞伎鑑賞、相撲観戦といった優雅な酒も流行した。こうして江戸300年の酒商売は、いずれの業界とも大体が栄えた状態だった。肴の数もさらに増え、刺身や鱠といった生物や、蒲鉾、半片といった練物、麩など今日とそう変わりのないものとなってきた。江戸中期の庶民の肴は干し魚、佃煮（切り昆布や川えびなど）、煮豆、香のものなどだったが、武士階級ではかなりの肴が膳に並べられている。

元禄６年（1693）４月29日の下級武士の結婚披露宴の献立（『鸚鵡籠中記』）は、「刺身、すずきの煮物、たです、いり酒、九年母、わさび、くり、汁、塩鴨、香のものいろいろ、梅干、竹の子、くしこ、焼あゆ、焼物、嶋えび、吹物、鰌、生椎茸、麩、塩辛、筒干、煮〆、がうな、鮓、すずきのわた、水物、なすひしみ、大こん、からすみ、小梅、かずのこ、ほかにいろいろ、酒」であった。

このように酒宴が贅沢になると、膳には魚が多く用いられることになり、次第に「さかな」といえば「肴」よりも「魚」を意味するようになった（それ以前､魚は「うお」または「いお」と呼ばれていた）。とりわけ日本橋には、江戸最大の魚河岸があって、そこでは新鮮な魚（大概は生簀での活魚）や干物、魚介加工品などのほか穀物、野菜類、調味料などさまざまなものが売られていたので、一年中賑やかにごった返していた。当時の料理や、日本橋魚河岸の様子などについては、『幻の料亭･日本橋「百川」』（新潮社刊､小泉武夫著）に詳しい。



◀両国の川開き。とにかく江戸の人口は多かった。水の上でもこのとおり。川開きの日などは、広い隅田川も屋形船でごった返し、船の上では大宴会が繰り広げられていた（『江戸名所花暦』）。



◀江戸時代の居酒屋風景。当時は店先で酒を飲ませながら、目の前で魚を卸して刺身のような肴を出していた。絵ではこの日の肴は鰹であった（『江戸末期。作者不詳。東京農業大学醸造博物館蔵』）。



◀酒の計り売り。酒屋の店頭で女童が持参した長頸徳利に漏斗を当て斗甕から柄杓で諸白を注ぐ酒屋の内儀。杉玉も見える。このようにきちんと計り売りされているところをみると、役所による酒造量と販売量の調べは厳密で、酒税の取立ても厳しかったに違いない（『人倫訓蒙図』元禄３年）。



◀酒の道を教える図（江戸時代）。昔は元服式を迎えると、日本橋の商家辺りでは正しい酒の飲み方を通じて、礼儀作法や精神の修養も教えた（江戸中期作者不詳）。



▲一升入りの柳樽（左）。一升ビン（右）のなかった昔は、「柳の酒屋」が考案し、配達用に使った柳樽が大いに重宝された。このような樽は、その後明治時代まで使われた。。

第 25 回中央区国際交流のつどい

International Exchange Party

11 月 18 日（土）、築地社会教育会館で「第 25 回中央区国際交流のつどい」が開催されました。27 カ国出身の外国人 101 人を含む 473 人が参加し、国際色豊かなひと時を過ごしました。

11/18(SAT) 12:00〜16:00



●和太鼓
Taiko(Japanese Drum) Workshop

「一家で来日して９ヶ月になります。けんちん汁が美味しかったです」
アレックスさんファミリー［ロシア出身］







●ロシア舞踊（ロシア・ジプシーダンス＆バラライカ演奏）
Russian Dance



●サリー着付け
How to put on a Sari



●サルサ
Salsa Dance





●盆踊り
Japanese Bon Dance



●墨絵
Sumie Ink



●イタリアの世界遺産紹介
Introduction of World Heritage in Italy



●防災コーナー
Disaster preparedness





●日本の遊び・海外
Japanese Games・Fore

東京の中心“わがまち中央区”は、世界中から外国人が集まる街。2017 年 11 月 1 日現在、区内の外国人居住者は 6,962 人にのぼります。市民レベルでの国際交流を深める場として、中央区文化・国際交流振興協会が毎年続けているイベントが「国際交流のつどい」です。25 回目を迎えた今年も、たくさんの外国人と日本人が集い、178 人ものボランティアの方々の協力を得て、一緒に 19 のプログラムを楽しみました。

毎年大好評の“料理コーナー”には、ロシア・スリランカ・日本の味が大集合。ボルシチ（赤いビーツなどが入ったシチュー）、ピロシキ（ひき肉とマッシュポテト入りの揚げパン）、ブリヌイ（カッテージチーズやヨーグルトで作ったクリームを挟んだクレープ）、4 種類の茶葉を煮出して作ったスリランカミルクティー、具だくさんのけんちん汁が振る舞われ、ご馳走を頬張る笑顔が絶えませんでした。

“防災コーナー”では、区内の避難所に備蓄している非常食メニューのシチューとクラッカーの試食などを体験。2017 年 8 月から運用が始まった、日本語・英語・中国語（簡体／繁体）・韓国語の 5 言語で表記できる「中央区防災マップアプリ」も紹介されました。

年ごとにテーマが変わる“休憩コーナー”は、今年はイタ



着付け
hono Etiquette





●日本の料理
Japanese Foods



●スリランカミルクティー
Sri Lankan Milk Tea

「勝どきに住んでいます。
みんな協調性があり、きれいなので、
長く暮らしたくなる街です。
このイベントも素晴らしいですね」

マウロさん・ステファニアさん夫妻
［イタリア出身］





●ロシアの料理
Russian Foods





●風呂敷
Furoshiki Wrapping



●呈茶・茶道体験
Tea Ceremony and Experience

「生け花がとても楽しかった！
将棋も面白かったです」

サムコットンさん
［オーストラリア出身］



Drawing





●生け花体験
Flower Arrangement Experience



●折り紙
Origami



の遊び
ign Games



●長唄三味線を弾いてみよう！
Let's try Shamisen

リアの世界遺産を紹介。ベネチアの仮面や州の旗、イタリア人のボランティアさんが持参したイタリア食材なども並び、コーヒーとチョコレートを片手に、イタリア気分を満喫できました。このほか、スリランカ衣装“サリーの着付け”は、予約リストがいっぱいになるほどの人気ぶり。“日本と海外の遊びコーナー”では、けん玉やコマといった日本の伝統的な遊びをはじめ、韓国、インド、ネパールのすごろくや盤ゲームも登場。ウクライナ人とベトナム人が将棋を指し合う交流もあり、10～20 代の若者たちを中心に大いに賑わいました。また、熱気あふれる“踊りコーナー”では、ロシア舞踊やバラライカ（弦楽器）演奏と歌のステージに盛大な拍手が送られ、サルサでは参加者が仲良く手を取り合いながらリズムに合わせて陽気にステップを踏み、盆踊りでは太鼓を囲んでみんなが輪になって踊り、盛り上がっていました。

そして、毎年充実している“日本の伝統文化体験プログラム”では、三味線、生け花、茶道、着付け、墨絵、風呂敷、折り紙のほか、和太鼓ワークショップも開催。たくさんの外国人が初めての体験に目を輝かせていました。

衣・食・遊びといった身近な文化を通じた楽しい国際交流イベントは、今年も大盛況のうちに幕を閉じました。

平成 28 年度の事業報告と決算

平成 28 年度事業報告

平成 29 年 7 月 5 日（水）に開催されました理事会において、平成 28 年度の事業報告及び収支決算報告が審議され、承認されましたのでその概要を報告します。

Ⅰ　文化振興事業

（1）機関誌の発行

「中央区文化・国際交流振興協会だより」を発行しました。

発行部数等　5,500 部　A4 判　8ページ
発行回数　　年２回(平成２８年７月―第６５号、同年１２月―第６６号)

（2）ホームページの運営

ホームページを適宜更新して、事業紹介やイベント等の情報を提供しました。
URL:http://www.chuo-ci.jp/
また、twitterやfacebookを利用して情報発信も行いました。

（3）コンサートの開催

親しみやすい音楽鑑賞の機会を提供しました。

日　　時　平成 28 年 10 月 7 日（金）
　　午後 6 時 45 分開演
会　　場　日本橋公会堂ホール「日本橋劇場」
内　　容　オペラに恋して～ユーモアあふれるおしゃべりを交えて～
出 演 者　郡　愛子、池田　直樹、松本　康子
入場者数　340 名
参 加 費　1,500 円



（4）文化講座の開催

「日本橋をめぐる食のはなし」をテーマに、浮世絵や発酵食などさまざまな視点から日本橋の食にまつわる歴史や江戸の食文化について学ぶ講座を開催しました。

第一回
日　　時　平成 28 年 9 月 29 日（木）
　　午後 6 時 45 分開演
内　　容　浮世絵にみる江戸の食
講　　師　国際浮世絵学会　常任理事
　　新藤　茂

第二回
日　　時　平成 28 年 10 月6日（木）
　　午後 6 時 45 分開演
内　　容　日本の『食』は日本橋にあり
講　　師　フードジャーナリスト・食文化研究家　向笠　千恵子

第三回
日　　時　平成 28 年 10 月 13 日（木）
　　午後 6 時 45 分開演
内　　容　江戸にみる日本橋の酒と食
講　　師　農学博士・東京農業大学名誉教授　小泉　武夫

会　　場　日本橋社会教育会館ホール
参加者数　延 492 名

（5）特別文化講演会の開催

各展覧会に関連した講演会（入場無料）をＮＨＫとの共催により開催し、区民等の文化意識の向上を図りました。

①日伊国交樹立 150 周年記念「カラヴァッジョ展」関連文化講演会

日　　時　平成 28 年 4 月8日（金）
　　午後 2 時 30 分開演
会　　場　日本橋公会堂ホール「日本橋劇場」
講　　師　群馬県立女子大学　文学部　美学・美術史学科准教授（西洋美術史）
　　大野　陽子
参加者数　418 名

②特別展「古代ギリシャ－時空を超えた旅－」関連文化講演会

日　　時　平成 28 年 7 月 12 日（火）
　　午後 6 時 50 分開演
会　　場　日本橋公会堂ホール「日本橋劇場」
講　　師　東京国立博物館　学芸研究部　調査研究課　考古室長
　　白井　克也
参加者数　422 名

③特別展「春日大社　千年の至宝」関連文化講演会

日　　時　平成 29 年 1 月 24 日（火）
　　午後 6 時 50 分開演
会　　場　日本橋公会堂ホール「日本橋劇場」
講　　師　東京国立博物館　学芸研究部　主任研究員　土屋　貴裕
参加者数　384 名



④日伊国交樹立１５０周年記念「ティツィアーノとヴェネツィア派展」関連文化講演会

日　　時　平成 29 年2月6日（月）
　　午後 6 時 50 分開演
会　　場　日本橋公会堂ホール「日本橋劇場」
講　　師　東京都美術館　学芸員　小林　明子
参加者数　405 名

（6）古典芸能鑑賞会の開催

中央区に深い関わりを持つ古典芸能を鑑賞する機会を提供することで、由緒ある伝統文化に対する愛着心を育み、その継承・普及を図りました。企画・制作は、「中央区古典芸能の会」に委託しました。

日　　時　平成 28 年 6 月 11 日（土）
　　午後 5 時開演
会　　場　日本橋公会堂ホール「日本橋劇場」
内　　容　講話「江戸幕末の物売りと日本橋魚市こぼれ話」
　　舞踊　清元「玉屋」
　　紙切り
　　常磐津「苗売り」
　　舞踊　義太夫「団子売」
入場者数　288 名
参 加 費　2,000 円(中学生以下　1,000 円)



（7）文化推進事業助成

区内文化活動をさらに促進していくために、区民等による文化活動等に対し、その経費の一部を助成するとともに、後援を行いました。
なお、平成 27 年度に区の助成制度が見直され、「文化創造・発信事業助成」及び「文化団体活動助成」の２制度に整理されたのにあわせ、平成 28 年度から協会が実施することになりました。また、これらの助成は、前年度に審査会で審査を行うとともに、事業終了後にもその効果等について評価を行い、結果を協会ホームページで公表しています。

（助成）

①文化創造・発信事業助成

助成金額：当該事業の対象経費の９／ 10 の範囲内（上限 200 万円）
助成件数：ア　平成 27 年度助成決定（平成 28 年度助成実施）　2件
　　イ　平成 28 年度助成決定（平成 29 年度助成実施）　4件

②文化団体活動助成

助成金額：当該団体活動の対象経費の１／２の範囲内（上限 40 万円）
助成件数：ア　平成 27 年度助成決定（平成 28 年度助成実施）　3件
　　イ　平成 28 年度助成決定（平成 29 年度助成実施）　1件

③文化推進事業助成

助成金額：当該事業の対象経費の１／２の範囲内（上限 10 万円）
助成件数：２件

（後援）
後援件数：10 件

（8）中央区まるごとミュージアムの開催

文化・芸術の秋に、無料のバスや船で区内を回遊しながら本区のさまざまな文化的魅力を区民等が体験できるよう、第９回「中央区まるごとミュージアム 2016」を中央区との共催で開催しました。

日　　時　平成 28 年 10 月 30 日（日）
　　午前 9 時～午後 5 時
場　　所　中央区全域
実施結果
- バス乗車人数（区内巡回、左右の２ルート。江戸バス無料）　合計 5,769 名
- 乗船人数（日本橋周遊、浜町～晴海、明石町水辺ライン周遊、日本橋～晴海の４コース）　合計 4,143 名
- イベント事業数　41 事業及び３協賛事業等
- イベント参加者数　延 65,000 名

（9）文化振興プロデュースチーム

「中央区文化振興プラン」の提言（平成 20 年３月中央区文化振興懇談会提言）に基づき、中央区と協会が協力して区民（企業、ＮＰＯ等を含む。）の自主的な文化活動の推進・拡大を図るため、平成 20 年度に文化への関心が高い専門家等からなるプロデュースチーム（構成員６名）を設置しました。平成 28 年度は、まるごとミュージアム 2016 の事業者連絡会に出席し意見を述べるとともに、区内全体の文化事業の推進について協議を行いました。

Ⅱ　国際交流振興事業

（1）国際交流のつどい

外国人と日本人との交流を推進するため、日本と外国の伝統文化の紹介や体験、踊り、料理の紹介等を通して相互の親交を深めました。

日　　時　平成 28 年 11 月 19 日（土）
　　正午～午後 4 時
会　　場　築地社会教育会館
内　　容
- ○ 伝統文化体験コーナー(着付け、茶道、生け花、墨絵、風呂敷の使い方、和太鼓ワークショップ、折り紙)
- ○ 懇談コーナー（料理）(スペイン料理「スペインオムレツ」、スリランカミルクティー、日本の料理「炊き込みごはん・出汁」)
- ○ 国際交流サロン(三味線の演奏と体験、ティールーム、国際交流サロンの紹介)
- ○ 防災コーナー(防災用品の展示、非常食の試食等)
- ○ サリーの着付け
- ○ 日本の遊び・海外の遊び（コマ回しなどの日本の伝統的な遊びとチェスなどの海外の遊びを紹介）
- ○ 踊りのコーナー（フラダンス、スペイン舞踊、盆踊り）
- ○ サザランド市姉妹都市提携 25 周年記念展示



参加者数　452 名（外国人 84 名、日本人 179 名、ボランティア 182 名、事務局 7 名）

（2）国際交流サロンの開催

区内在住・在勤の外国人と日本人が気軽に交流ができ、日本語の会話や日本の文化に触れるとともに外国の文化にも触れることができる場を提供するため、ボランティアの協力を得て「国際交流サロン」を月 1 回（11 月を除く。）開催しました。

会　　場　協会講習室他
内　　容　スプリング・ティー・パーティ、コーヒーで交流、浜離宮庭園でハガキ絵づくり、七夕祭り、盆踊り、スポーツ交流、和菓子づくり、凧づくり、お茶を体験、もんじゃ、防災訓練
実施回数　11 回
参加者数　外国人 延 174 名、日本人 延 140 名、ボランティア 延 92 名



（3）日本語教室

日本語でのコミュニケーションが困難な区内在住・在勤の外国人を対象に、協会の日本語ボランティアによる語学の指導及び学習者と指導者の相互理解を深める場として、通年で教室を運営しました。また、教室参加希望者の増加や多様化する要望に対応するため、ボランティア主催による教室の運営について、助成金の交付や後援名義の使用、学習者紹介等の支援を行いました。

（4）日本語指導者養成講座の開催

日本語教室の受講を希望する外国人の増加と多様化する要望に対応するため、協会主催の日本語教室やボランティアが自主的に運営する日本語教室で、ボランティア活動を希望する方を対象に日本語指導者養成講座を開催しました。



期　　間　平成 28 年 6 月～ 10 月　全 44 時間
受講者数　28 名
講　　師　西川　寛之（明海大学外国語学部講師）
会　　場　協会講習室、新富区民館

（5）日本語ステップアップ講座

各教室で活動する日本語指導者の学習需要に対応するとともに、指導力・技法のレベルアップを図るため、ステップアップ講座を開催しました。

期　　間　平成 28 年 5 月～平成 29 年 2 月　全 7 回（14 時間）
受講者数　延 123 名
講　　師　公益社団法人　国際日本語普及協会へ講師派遣を委託
会　　場　協会講習室

（6）ボランティア活動支援

日本語教室の日本語指導者をはじめとする各種の協会登録ボランティアの活動を支援するとともに、中央区から要請を受け、区事業実施時に協会登録の通訳ボランティアを派遣しました。また、東京都が実施する「外国人おもてなし語学ボランティア」育成講座を共催で行いました。

①ボランティアの種類及び登録者数（平成 29 年 3 月末日現在）

登録者数：343 名（実人員）
- 通訳・翻訳ボランティア：92 名
- イベントスタッフボランティア：184 名
- 日本語ボランティア：203 名
- 国際交流サロンボランティア：15 名
- ホームステイ・ホームビジットボランティア：16 名
- 防災語学ボランティア：52 名

②ボランティアの派遣・活動

ア　通訳ボランティア　　延２０名（保健センターにおける 1 歳 6 か月児健診など）
イ　イベントボランティア　　1 名（国際交流サロンにおける茶道の講師）

③「外国人おもてなし語学ボランティア」育成講座（東京都との共催）

ア　セットコース（おもてなし講座＋語学（英語）講座）
期　　間　平成 28 年 8 月　5 日間（11 時間 30 分）
対　　象　入門～初級の語学力（英語）を有する者
受講者数　32 名
会　　場　新富区民館

イ　おもてなしコース（おもてなし講座）
期　　日　1回目　平成 28 年 9 月　3日（土）
2回目　平成 29 年 3 月 18 日（土）
（各回 3 時間 30 分）
対　　象　英語による簡単な日常会話ができる者
受講者数　1 回目　58 名
2 回目　56 名
会　　場　日本橋公会堂集会室

（7）姉妹都市親善写真展

姉妹都市サザランド市と本区との親善を一層深めるため、お互いの生活や風景、行事等を紹介する写真を交換し、写真展を平成２９年１月～２月に中央区役所１階、日本橋区民センター１階及び月島区民センター１階で順次開催しました。

（8）外国客船歓迎式

東京港晴海埠頭に着岸する外国客船入港時の歓迎行事に参加し、記念品を贈呈しました。

主　　催　東京都港湾局
一般社団法人東京都港湾振興協会
入 港 数　5 隻（初入港 4 隻、再入港 1 隻）

（9）国際交流推進事業助成

協会の目的とする事業を推進するため、区民が主体となって行う国際交流事業に対して、事業の実施に要する経費の一部を助成するとともに、後援を行いました。

助成金額：当該事業の対象経費の 1 ／ 2 の範囲内（上限 10 万円）
助成及び後援件数：1 件

平成 28 年度決算

＜収入＞

科目	決算額（円）	説明
事業収入	1,274,500	古典芸能鑑賞会、コンサート参加費
区補助金	93,671,000	中央区からの補助金
寄付金	100,000	東京銀座ロータリークラブからの寄付金
雑入	269	預金利子
収入合計	95,045,769	

＜支出＞

科目	決算額（円）	説明
事業費	49,743,526	
文化振興費	44,556,792	機関誌の発行、コンサート、文化講座、特別文化講演会、古典芸能鑑賞会、文化推進事業助成、中央区まるごとミュージアム、文化振興プロデュースチーム
国際交流振興費	5,186,734	国際交流のつどい、国際交流サロン、日本語教室、日本語指導者養成講座、日本語ステップアップ講座、ボランティア活動支援、姉妹都市親善写真展、外国客船等の歓迎式、国際交流推進事業助成
管理費	35,728,602	
人件費	32,499,604	職員の給与
管理運営費	3,228,998	理事会、事務費
予備費	0	
合計	85,472,128	
区返還金	9,573,641	中央区補助金の精算返納
支出合計	95,045,769	

協会主催の日本語教室

①水曜日教室
日　　時　毎月第 1・第 2・第 3 水曜日　午後 6 時 30 分～ 8 時
会　　場　女性センター「プーケ 21」
実施回数　31 回
参加者数　外国人 延 518 名、ボランティア 延 601 名

②木曜日教室
日　　時　毎月第 1・第 2・第 3 木曜日　午前 10 時～ 11 時 45 分
会　　場　協会講習室
実施回数　30 回
参加者数　外国人 延 491 名、ボランティア 延 419 名

③土曜日教室
日　　時　毎月第 2・第 3・第 4 土曜日　午前 10 時～正午
会　　場　協会講習室
実施回数　31 回
参加者数　外国人 延 675 名、ボランティア 延 535 名





協会が支援する日本語教室

①ワールドフレンズ日曜にほんごクラブ
日　　時　毎週日曜日　午前 10 時～ 11 時 30 分
会　　場　日本橋社会教育会館
実施回数　48 回
参加者数　外国人 延 614 名、ボランティア 延 297 名

②日本語おたすけたい
日　　時　月曜日（月 3 回）　午後 7 時～ 8 時 30 分
会　　場　日本橋社会教育会館
実施回数　33 回
参加者数　外国人 延 248 名、ボランティア 延 268 名

③月島日本語倶楽部
日　　時　毎週火曜日　午前 10 時～正午
会　　場　月島社会教育会館
実施回数　43 回
参加者数　外国人 延 264 名、ボランティア 延 227 名

④日本語コミュニケーション・パートナー
日　　時　毎月第 1・第 2・第 3 火曜日　午後 7 時～ 8 時 30 分
会　　場　新富区民館
実施回数　35 回
参加者数　外国人 延 179 名、ボランティア 延 184 名

⑤銀座日本語教室
日　　時　毎月第 1・第 2・第 3 水曜日　午前 10 時～ 11 時 30 分
会　　場　築地社会教育会館
実施回数　33 回
参加者数　外国人 延 227 名、ボランティア 延 276 名

⑥にこにこ日本語
日　　時　毎月第 1・第 2・第 3 木曜日　午後 7 時～ 8 時 30 分
会　　場　佃区民館
実施回数　33 回
参加者数　外国人 延 674 名、ボランティア 延 447 名

⑦にほんご生活
日　　時　毎週土曜日　午後 2 時～ 3 時 45 分
会　　場　築地教会別棟
実施回数　46 回
参加者数　外国人 延 416 名、ボランティア 延 277 名



10月29日（日）、第10回「中央区まるごとミュージアム」が開催されました。あいにくの空模様にもかかわらず、延べ30,000人が参加し、中央区の歴史と文化を楽しみました。

中央区まるごとミュージアム2017

10/29(SUN) 9:00～17:00

区制施行70周年となる2017年、「中央区まるごとミュージアム」が記念すべき10回目を迎えました。このイベントは、中央区全体を一つの大きな“ミュージアム”に見立てて、区内を無料運行するバスや船でつなぎ、多彩な催しを楽しみながら街の魅力を再発見する秋の恒例イベントの一つとなっています。

当日は台風の接近に見舞われ、あいにくの空模様となりましたが、延べ30,000人にご参加いただき、新たに5つのイベントを加えた41のバラエティ豊かな催し（全43事業のうち、中止や内容変更の事業あり）をお楽しみいただきました。

目玉企画の一つ、10周年記念「中央区まるごとバスツアー」では、「中央区まちかど展示館　神輿めぐりコース①・②」、「中央区近代建築物100選めぐりコース」、「中央区水辺めぐりコース」という4つのスペシャルツアーが組まれ、事前募集に当選した方々（各コース定員15名）がまちめぐりを堪能しました。ツアーガイドを務めたのは「中央区文化財サポーター協会」のメンバー。豊富な知識と愛情あふれるまち案内は大好評でした。一番人気だった「水辺めぐりコース〈写真①②〉」では、バスあり、船あり、薬研堀不動院の講談ありと盛りだくさん。参加した皆さまも大満足でバスを降りました。

このほか、京橋エドグラン地下1階の中央区観光情報センターでは中央区の町名が入った和布を使った「粋な江戸まち37町【グリーティングカード】作成体験〈写真③〉」が、ポリスミュージアム（警察博物館）では珍しい「指紋採取体験〈写真④〉」が開催され、大人も子どもも初めての体験に夢中。月島社会教育会館で開催された、薬剤師さんや管理栄養士さんたちによる「薬局 DE 健康づくり～アロマ・栄養・薬を知って、心も体も健康に～」や、表彰式＆ワークショップが行われた「トリトンこども美術コンテスト2017」も多くの人でにぎわいました。

また、シャープペンシルと万年筆を自分で組み立てる「パイロット ペンの組立講座〈写真⑤〉」も、午前中から満員御礼の大盛況。雨のため会場を屋内に移して開催された「銀座・懐かしの大正昭和の風景〈写真⑥〉」では、アンティークな和雑貨の数々に外国人来場者も興味津々。銀座レトロギャラリーMUSEE（ミュゼ）では、「近代建築MUSEEまるごと版企画展～銀座フロッタージュ2017〈写真⑦〉」が企画され、銀座界隈の老舗の壁などを鉛筆で魚拓のように写し取る“フロッタージュ”を通じて、歴史ある街と若い才能が交差する最新アートを目の当たりにできました。そして、毎年恒例の「スタンプラリー〈写真⑧〉」抽選会では、なんと午前中から大当たりが出てツイッター（インターネットの情報サービス）でも話題に。抽選会場には夕方まで行列ができました。

今年もご参加いただきました文化事業者・団体の皆さまやボランティアの皆さまの多大なご協力のおかげで、中央区ならではの素晴らしいイベントとなりました。この場をお借りいたしまして、改めて感謝申し上げます。

また来年お会いしましょう！



①まるごとミュージアム10周年記念 中央区まるごとバスツアー



②中央区まるごとバスツアー 薬研堀不動院で講談を聞く



③粋な江戸まち37町【グリーティングカード】作成体験



④指紋採取体験



⑤パイロット ペンの組立講座



⑥銀座・懐かしの大正昭和の風景



⑦近代建築MUSEE まるごと版企画展～銀座フロッタージュ2017



⑧スタンプラリー（指紋採取・パトカー乗車体験）

表紙　日本橋1－19三菱倉庫日本橋郵便局

小川　幸治

昭和5年建設当時の三菱倉庫は、高速道路に姿を変えた楓川と日本橋川を背景に、船舶の姿をしている。歩道橋から望む外観は、南方に船出する船体を思わせ、円形のしなやかな壁面は、同じ昭和通りに並ぶ日本橋郵便局の直線と対照的な街並みをみせてくれる。

特集記事は、現在、東京農業大学名誉教授をはじめ全国の大学で客員教授を務めておられるなど、幅広くご活躍されている発酵学者（農学博士）の小泉武夫氏に「江戸にみる日本橋の酒と食」をテーマに寄稿していただきました。25回目を迎えた「国際交流のつどい」では、料理（ロシア料理、日本の料理（けんちん汁）、スリランカミルクティー）や踊り（ロシア舞踊、サルサ、盆踊り）、呈茶・茶道等日本の伝統文化の体験、イタリアの世界遺産紹介など様々なコーナーに多くの方々が参加され楽しく交流を深めていただきました。節目の10回目となった「まるごとミュージアム2017」では、台風の影響による荒天のため、一部のイベント等が中止や変更となりましたが、新しい5つイベントを含む41の文化事業が繰り広げられ、延べ30,000人の方々に中央区の文化的な魅力を満喫していただきました。

発行／中央区文化・国際交流振興協会　〒104-0041　東京都中央区新富1-13-24　新富分庁舎3F　TEL 03-3297-0251　FAX 03-3297-0253　URL: http://www.chuo-ci.jp/